

宇宙生命哲学

ことばはじめ

74

北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者

伊藤 俊洋

宇宙開発は地球上の文明の進化のため

宇宙から地球を見るといふ視点で、俯瞰的に地球上の生命現象を理解・考察し、人類の一人ひとりに根源的な生き方を提言することが、このコラムの使命である。「宇宙生命哲学」という看板を掲げて、様々な課題に焦点をあてながら、社会に問いかけてきた。

この度、国立天文台ALMAプロジェクト教授阪本成一先生の「宇宙から地球を見て、人類の未来を考える」というご講演を拝聴する機会があった。阪本先生は、JAXA（日本宇宙開発機構）での教授在任時には、はやぶさ1号・2号、かぐや、あかつきなどのプロジェクトを指揮され、国立天文台チリ観測所の所長としても大きな功績をあげられた。一般市民向けの宇宙科学研究に関わる広報も担当され、天文学や宇宙科学に限らず科学全般をもっと身

近なものにして、科学的にもを考える習慣を広めることが社会にとって大切であることを常々口にされていると伺った。

人類はなぜ宇宙へ行くのか。それは、地球上の文明をより豊かなものにするためである。宇宙には、地球上には存在しない厳しい環境があり、その環境を利用して様々な実験が行える。人類の宇宙での体験は、地球上の文明に対して、計り知れない貴重な情報をもたらす。人類が宇宙を目指す目的は、地球が何物にも代え難い貴重な惑星であることを確かめにゆくのである。宇宙空間で生活する覚悟があれば、地球上の生活は比べようがないくらい平穏である。逆に言えば、私たちは、常に宇宙的視野で身の回りを眺め、自分達が奇跡的に恵まれた環境で生活していることに気が付かなければならない。宇宙人との通信の可能性についても、ドレイクの方程式（銀河系に存在し人類と接触する可能性のある地球外文明の数を推定する算術的な式）を用いて、シミュレーションされた。

月と火星の環境と地球環境を比較されながら、生活空間の様々な違いについて触れられ、惑星間移住

の困難性を説かれた。阪本先生のご講演は、私たちが提唱する「宇宙生命哲学」と驚くべき共通性を持つことが



アルマ (ALMA: アタカマ大型ミリ波サブミリ波干渉計) 望遠鏡
ヨーロッパ、東アジア、北米とチリ共和国が協力してチリアタカマ砂漠の標高5000mの高地に建設、運用している国際的な天文観測施設。66台の高輝度パラボラアンテナを設置し、それらをまとめて世界最大の電波望遠鏡として活用
写真は <https://alma-telescope.jp/about/>
ALMAアルマ望遠鏡とは10日本が開発したモリタアレイより

わがかり、講演の後、懇親会でもそのことについて確認し、意気投合することができた。私は生涯現役を目指す者として、これからの人生で、さらに「宇宙生命哲学」という概念を世の中に広めようとしているが、ほぼ同じ考えで活動している方を、最先端の天文学者の中に発見することができ、この上ない喜びを感じた次第である。